View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

7. 口唇・口蓋裂における海外医療援助について

口腔外科学
越路千佳子，土肥　豊，増山裕信，泉　さや香，和久井崇大，麻野和宏，今井　裕
麻酔科学
金子瑞恵，藤井宏一，篠崎未緒，深川大吾，北島敏光

【目的】当科で行っている口唇口蓋裂を中心とした先天異常に対する海外医療援助活動について総括し，活動の向上を図ることを目的とする．

【方法】2005 年から 2010 年までの 6 年間に行ってきた活動において，①海外医療援助に至った経緯，②実施した国ならびに地方，③診療メンバー，④活動資金，⑤活動状況の実際，⑥症例，などについて取りまとめ，活動全体に対する問題点について検討した．

【結果】①経緯：日本口蓋裂学会での活動が評価され，(NPO) 日本口唇口蓋裂協会より協力を依頼された．

②実地した国ならびに地方：2005，2006 年はベトナム社会主義共和国・ベンチェ省にて，2007 年からはモンゴル国・ドルノゴビ県，ホブト県，ヘンティ県と首都ウランバートルで実施した．

③診療メンバー：2005 年のベトナムでは他大学との合同で，獨協医大からは口腔外科医のみ，2006 年以後は口腔外科医，麻酔科医，看護師によるチームで診療活動を行った．

④活動資金：公的資金の獲得と大学や他の機関からの援助による（総額約 350 万円）

⑤活動状況の実際：日本では活動地域と日程の決定，現地情報収集，医療器材・薬剤の購入等を，現地では術前診察と手術室設営，手術実施（技術移転を含む），現地医師とのミーティング等を行った．

⑥症例：ベトナムでの手術症例は 12 例，モンゴルの手術症例総数は 33 例，診察症例総数は 78 例であった．

⑦問題点：1) 事前情報が実態と異なる点が多い，2）医療機器ならびに薬剤などが不十分，3）術後の観察が充分に出来ない，4）患者ならびに現地医師との交流は通訳を介するため確実性に欠ける，5）国内移動に時間を有することが多い，などが考えられた．これらのうち 1)，2)，5）については文化や国勢の相違により直ぐの解決は困難であるが，3）では帰国後にインターネットを利用し，患者情報を得る努力をすること，また 4）は語学力の向上に努めるなどして改善を図る必要があると考えている．

8. 当科における小児 GERD 症例の診断と治療

越谷病院 小児外科
藤野順子，石丸由紀，池田　均

【目的】過去 3 年間に当科に GER 疑いで紹介された症例の診断，治療について検討した．

【対象】2007 年 10 月から 2010 年 9 月までの過去 3 年間に当科に GER 精査目的で紹介となった 42 例．

【方法】24 時間 pH モニタリングにおける reflux index (RI)，ならびに上部消化管内視鏡検査における逆流性食道炎の所見はロサンゼルス分類で評価し，その結果と治療に関して後方視的に検討した．

【結果】症例の男女比は 32：10，年齢 1 ヶ月～42 歳（中央値 10 歳）であった．主症状は呼吸器症状が 29 例（69%）（うち肺炎 6 例，喘息 3 例），および嘔吐が 13 例（31%）（うち血性嘔吐 2 例）であった．42 例中 33 例に内視鏡検査が施行され，ロサンゼルス分類で評価すると Grade N 4 例, Grade M 11 例, Grade A 9 例, Grade B 4 例，Grade C 2 例，Grade D 3 例であった．それぞれの RI の平均値は 3.2%，9.1%，20.7%，34.5%，17.0%，32.1%で，内視鏡所見で粘膜障害が高度であるほど RI 値が高くなる傾向があった．治療に関しては噴門形成術 20 例, 胃瘻造設術 3 例，制酸剤投与 8 例，経過観察 2 例の 4 群に分けられ, 各群の RI の平均値は 22.2%，1.0%，12.2%，2.9%であり，逆流防止術を要した群で最も高値であった．治療とロサンゼルス分類の各群との検討では，噴門形成術を施行した群では M4 例，A8 例，B3 例，C2 例，D3 例であり粘膜障害の程度は多彩であり，粘膜障害が軽度でも手術が必要となることがあった．制酸剤投与群では N1 例，M5 例，A1 例，B1 例で，胃瘻造設術と経過観察の群では N，M のみであった．

【結論】小児 GER 症例は呼吸器症状や嘔吐の症状で紹介されることが多い．ロサンゼルス分類で粘膜障害が軽度であっても外科的治療が必要となることがあり，診断は pH モニタリング，内視鏡検査など多岐にわたる結果を総合的に判断してより適切な治療法を選択する必要があると考えられた．